

## 参加報告

阿山 みよし

宇都宮大学工学部

2001年6月24日から29日にかけて、米国ニューヨーク州ロチェスター市のリバーサイド会議場において国際色彩学会が開催された。KodakとXeroxという画像に関係する巨大企業のお膝元であり、世界の色彩画像研究をリードするロチェスター工科大学(RIT)がある街での開催とあって、参加人数はOn-Siteの参加登録も含めると400人を上回る大盛況であった。

開催初日に配付された参加者名簿による国別参加人数を表1に示す。日本からは開催地アメリカに次ぐ59名という大人数で、しかも大学院生が10名程度もあり、そのほとんどが口頭講演やポスター発表を行っていた。また、日本の千葉大学と共にロチェスター工科大学と協定を結んでいるイギリスのダービー大学からも総勢20名近くの参加があり、多くの大学院生が発表していた。日本の学生の発表内容は国際的にみても遜色のないもので、皆堂々と発表し、自らの研究を国際舞台で披露する積極的な姿勢があった。若い世代の国際化が進んでいるのは頼もしいことである。しかしながら、英語が母国語の人々や英語圏に留学している人々と比較するのは極めて不公平とはいえ語学の壁は厚く、内容が十分に理解されなかったり質疑応答にならなかったりするの残念なことである。語学力不足で十分に評価されないのは本当に悔しい一方、まともな議論ができて評価された時は大変嬉しいものなので、21世紀を担う世代には、国際舞台での場数を踏み積極的に鍛練して欲しいと思う。筆者が発表したVisionセッションの座長であるシカゴ大学のPokorny教授も、日本人が多くの興味深い研究発表をしているのはすばらしいことだと言ってくれた。社交辞令とはいえ日本人として大変嬉しかった。

さて、本題である学会の内容紹介をしよう。会議構成を表2に示す。今回は色彩画像や建築関係のセッションが多いのが特色である。また、上述のダー

ビー大学のLuo教授のグループが精力的に取り組んでいる色差および色空間に関するセッションも新しい色差式CIEDE2000を睨んでなかなか盛況であった。

筆者は今回初めてまともにArchitectureセッションのOberascher氏の講演を聴講したが、偏光メガネを多数持ってきて照明オブジェの両眼視差画像で聴衆を楽しませてくれた。美しいスライドと時間を気にしない発表が印象的であった。

Visionのセッションは2つとも大半が日本からの発表で、今さらのことながらアメリカにおける色覚研究グループと色彩工学グループの乖離が如実に現われていた。このセッションの唯一のアメリカからの発表は現在ロチェスター大学で研究中の山内氏による発表であった。各個人のユニーク黄波長は、Adaptive Opticsで実測した網膜におけるL錐体とM錐体の比率によらないこと、赤または緑の色メガネの長期使用による順応でユニーク黄波長が一定のところまでは変化し、はずすとまたもとに戻ることから、ユニーク黄波長は視覚経験に依存するフレキシブルな色覚機構により決定されていると結論づけていた。生体の視細胞を無侵襲で可視化できるAdaptive Opticsはコンタクトレンズや眼科診断への応用が期待されている先進的技術で、結論はともかく興味深く聴いた。久々に登場の色覚のGuth Modelで有名なLee Guth氏から「ユニーク黄波長がL錐体とM錐体の比率に依存するという仮定は受け入れられていないから前提としておかしい」という旨のコメントがあったが、筆者はそうでもないと考えている。

この会議の直前に国際照明委員会(CIE)の第1部会会議が同じRochesterで開催されていた。第1部会は「視覚と色」に関する部会でCIEの中では国際色彩学会とは最も密接な関係があり、筆者を含めて両方に参加した人は少ない。このような状況から、

AIC2001では「色彩を機能させるのにCIEはどのようにしてAICを支援するのか」と銘打ったシンポジウムが開催された。CIE第1部会の副会長であるM. Pointer氏とF. Vienot氏、色差式を検討しているL. Luo氏、色の見えモデルCIECAM 97sをまとめたM. Fairchild氏、画像関係の第8部会部会長のT. Newman氏などが、両者の協力関係の経緯と必要性、CIECAMの過去現在未来、画像工学の立場からのニーズと支援、生理学的知見に基づいた色度図などについて各々簡潔にまとめられた講演を行った。批判的に言えばCIEの役割紹介に終始したような感もあるが、現実問題としてはCIEの名前しか知らないAICの参加者も結構いるようなので、CIEの内容を広く認識してもらおう目的は達成できていたと思う。

偏見といわれるかもしれないが、筆者の年代の日本人的感覚からするとアメリカで開催される学会運営は何かと粗っぽい印象を受けた経験が何度かある。しかし今回は受付もCynthiaさんを見つければいつも笑顔で親切に対応してくれたし、会場運営のスタッフもなかなかしっかりしていたし、朝食も昼食も良かった。難をいえば空調がアメリカ人に最適化されていて(?)会場が寒かったが、それは全米どこでも同じである。AIC2001実行委員長であるPaula Alessi氏の活力と気配りのおかげだと思う。ISCCで賞を受賞し、受賞スピーチでは普段は気丈な彼女が家族への感謝を述べるくだりで涙声になっていたのが印象的であった。

表1. 配布リストによる国別参加人数

国名	人数	国名	人数
アメリカ	195	スイス	4
日本	58	台湾	4
イギリス	29	トルコ	4
オーストラリア	11	ハンガリー	4
スウェーデン	10	スロベニア	3
ドイツ	10	ブラジル	3
フランス	9	香港	2
アルゼンチン	8	オランダ	1
カナダ	8	タイ	1
スペイン	8	ニュージーランド	1
フィンランド	7	ノルウェー	1
韓国	6	ベネズエラ	1
イタリア	5	ペルー	1
オーストリア	4	南アフリカ	1

表2. 会議の構成

分類	セッション名
特別 (2)	Opening Session and Keynote Addresses The Future of Color and Closing Session
シンポジウム (9)	Color Issues for Digital Archives Environmental Color Design How is CIE Helping Us Make Color Work? How Should We Teach Color? Imaging Techniques of Spectral Estimation (Spectral Imaging) The Artist and Digital Media The Future Role of Color in the 3-D World The State of Art and Future of Color Management What is Color For? What is Color?
一般講演 (18)	Architecture (2 sessions) Art and Design (3 sessions) Color Appearance Color Appearance Color Difference (2 sessions) Color Education Color Imaging Applications Color Measurement (2 sessions) Color Order Systems Color Preference ECD/Architecture Image Analysis and Synthesis Industrial Color Industrial Color Physics Teaching Aids Vision (2 sessions) What is Color ?
ポスター (2)	
チュートリアル (1)	The Whys and Hows of Color Management